

博士学位申請論文の要約

論文題目：江戸時代後期における丹後縮緬産地形成に関する歴史地理学研究

松岡宏樹

第Ⅰ章：序論

第Ⅰ章では、産地形成に関する歴史地理学および日本史の先行研究を整理した。繊維産業の近代化を取り上げた歴史地理学的研究では、産地の発展段階と空間的な構造の把握に主眼が置かれた。その後産地形成を可能にする地域内部の要因について分析が進み、村落構造や土地利用、機能分化などが重要な因子であることが解明された。さらに近世においては、産地の形成過程が社会制度や政治支配の影響を受けることが明らかにされた。流通構造について分析した諸研究では、生産から消費までを結ぶ結節地域として流通をとらえ、内在する諸要因の関連を明らかにする研究視角が確立された。また近年では、地域形成に個々の主体や社会関係が果たした役割に注目が集まっている。

日本史分野における産地形成に関連した研究をみると、工業発展段階論では、機業の近代化を農家副業から問屋制家内工業、工場制工業へ至る過程としてモデル化し、近世期の農村工業を近代化の一段階としてとらえた。それに対して社会経済史分野では、ヨーロッパにおける近代化との比較をもとに、日本の工業化の独自性を明らかにすることが目的とされた。農村経済史分野では近年、農家による戦略的な家内工業への参加と地域社会を動機とした豪農の投資を「在来的経済発展」として捉える視点が注目されている。また近世流通史研究においては、取引の実態を明らかにすることで、問屋仲間を頂点とする幕藩制的流通を解体していくような地方商人・駄賃稼ぎなどの活動を描き出す成果が挙げられている。

以上のように先行研究を整理すると、産地形成の観点から流通を取り上げた研究が少なく、他地域との関係が絹織物産地の形成過程にどのような影響を与えたかは明らかになっていない。加えて、近世の地域と主体との関係に未だ不明な点が多いことが課題として挙げられる。本稿では江戸時代後期における丹後縮緬産地を対象として、人・商品・資金・地域の動きを分析することで、産地と集散地、それらをつなぐ流通の構造および主体の活動が産地形成に果たした役割を解明することを目的とする。生産→集荷→輸送→販売という丹後縮緬流通の流れに沿って、各段階における主体の活動と地域をめぐる状況を史料か

ら裏付けた上で、その相互関係と産地の形成・変容への影響について検討するという方法をとる。

第Ⅱ章：対象地域の概要と産地間の比較

第Ⅱ章では、丹後縮緬産地の概要を先行研究に沿って整理するとともに、同時期に成立した他産地との比較を通して、江戸時代後期における丹後縮緬産地の特徴と位置づけを明確にした。丹後縮緬産地はその成立初期から、京都との強い結びつきの中で成長してきた。支配する宮津藩は丹後縮緬流通の掌握を狙ったものの、機屋と京都問屋との経済的なつながりを断つことはできず、機株の管理と運上の賦課をするにとどまった。丹後と京都との流通の中で、村で任命された飛脚が縮緬を輸送する役割を担ったことも先行研究では明らかにされている。19世紀以降に京都問屋の影響力が弱まると、在地資本や城下町商人、宮津藩による流通をめぐる動きが活発化していった。先行研究では西陣・京都問屋・藩権力・町在の商人による零細機業家に対する支配の試みと、それに対する対抗という形で産地の歴史が把握された。しかし資本蓄積に至る過程は必ずしも明確にされておらず、生産者と流通に関わる者による対立関係が強調されすぎたきらいがある。地域構造の変化と主体の戦略を解明するとともに、地域どうしの対抗関係にとどまらない相互関係が産地形成にいかなる影響を与えたかを明らかにする必要がある。

同時期に成立した桐生・長浜・岐阜の絹織物産地との比較によって、以下のような特徴が明らかになった。それぞれ一円的な支配を受けた長浜と岐阜では、藩による町方への集荷を通じた流通支配が江戸時代中期から行われた。一方の丹後・桐生では藩権力による流通の一本化は遅れたか、もしくは最後までなされなかった。また丹後や桐生では、都市問屋に対する在地の生産者や商人の発言力が相対的に強いことが特徴として挙げられる。藩領支配・藩の流通政策・市場への影響力・技術移転の時期などが流通構造の差異に影響を及ぼしたと考えられる。ただし、丹後在方における自律的な流通が維持された要因については明らかになっていないため、本稿ではその実証を試みる。

第Ⅲ章：江戸時代後期の絹織物産地における生産基盤と豪農経営

—丹後縮緬産地加悦谷の角屋家を事例に—

第Ⅲ章では、幕末期の宮津藩領の村々における村高や人口構成などを記録した「丹後国村々版籍取調帳」の統計分析を行い、藩領内における生産手段の構成と分布を明らかにし

た。重回帰分析の結果、人口に影響を与える変数として村高・機数・漁業生産・新田高が見いだされ、機数は村高よりも係数が低いことが分かった。絹織物産業は農業開発がすすんだ平野部で発達しており、農業を補完するのではなく付加的な位置づけであった。また「版籍取調帳」に記された人口構成をもとにクラスター分析を行った結果、丹後縮緬生産における中心的な村々では生産年齢人口の比率が高く、労働力が豊富であったといえる。村ごとの機数の経年変化をみると景況に応じて柔軟に変化しており、文政年間(1818-1831)までは全体的に増加していた。しかし天保15(1844)年には加悦谷南部で機数が減少した一方、岩瀧村など阿蘇海沿岸から加悦谷北部では堅調な増加を続けていた。

続いて加悦町を拠点として土地経営や金融業、縮緬機業を行った豪農の角屋家を対象とし、その経営戦略を資産記録「年々要用控」の分析から明らかにした。角屋家の経営規模は天保期から幕末にかけて概ね増加傾向にあったが、その経営の重心は絹織物生産から商業・金融へと移っていった。天保期以降に京都問屋の影響力が弱まったことで、角屋家は有力生産者としての性格よりも、問屋外取引・村への融資・原料系取引などを通じた商業・金融的な性格を強めたといえる。上述した産地における地域構造を基盤として、角屋家は加悦谷を金融圏として取り込み、縮緬産地と外部との結節点として機能することによって資本蓄積を進めていったと考えられる。

第Ⅳ章：江戸時代後期の京都における商業立地

—GISによる商店分布の分析—

第Ⅳ章では、江戸時代後期の京都を対象に、『京都買物独案内』と『花洛羽津根』という案内記類に掲載された商店の分布を分析した。各商店が取り扱う商品ごとに〈繊維製品〉〈薬類〉など19種類の分類を行い、主要な商品については分布を地図化した。まず、二つの史料で掲載された商品の構成が異なっていることから、武士や寺社向けの商店が多い『花洛羽津根』に対して、一般大衆の買回り品的需要を反映した『京都買物独案内』の性格が明らかになった。このような史料の性格の違いから、掲載された店舗も『京都買物独案内』では下京を中心とした分布となった。さらに、嘉永版の『京都買物独案内』は天保版よりも店舗が狭い範囲に集中する傾向を示した。

続いて、〈繊維製品〉と〈薬類〉を取り扱う商店の分布を比較した結果、上京や下京の旧来の商業中心には生産者に近い商店が集中した一方、小売や卸などの消費者に近い商店は下京の周辺部に立地したことが分かった。これは同業者による集積の原理と、買回り品と

いう商品の特性の、どちらが強く出るかによって説明される。さらに、服飾・化粧品等を取り扱う小規模な商店である「京都小間物諸色并手遊人形屋中」の分布を地図化することで、天保期以降の京都における新たな商業の主体として現れた業種が、下京の周辺東部に繁華な商業中心を形成していたことが明らかになった。

第V章：江戸時代後期の丹後縮緬流通からみた産地と集散地との関係

第V章では、機屋組合によって残された史料をもとに、江戸時代後期の丹後縮緬産地と集散地である京都とを結ぶ流通構造を検討した。そのための手法として、流通の中で縮緬の輸送に携わった飛脚に着目し、その担い手や年間の業務日程、京都における時空間的な経路を分析した。京都における飛脚の主な立ち寄り先となったのは問屋と飛脚宿であり、飛脚は飛脚宿を拠点としながら問屋へ縮緬を入荷し、機屋に代わって価格交渉なども行った。問屋の立地があまり変わらないのに対して、飛脚宿の立地は京都の社会経済的な状況に応じて変化しており、飛脚宿は都市空間の中で流通構造の影響を受けやすい施設であったことが分かる。

飛脚の担い手は村によって異なるが、いずれも機屋の中から選ばれた可能性が高い。また機屋仲間との契約に基づいて任命されたこともあり、飛脚は機屋の利益を代表するという前提の下、縮緬の輸送を行ったと考えられる。飛脚の業務日程は年二回の入荷を軸として設定されており、農閑期や縮緬取引の繁忙期に適合する形となっていた。また往復ごとに代銀の受け渡し期限が定められており、飛脚は流通上の制約の中で活動していた。その一方で、京都においては飛脚宿を軸として他の飛脚や知人などと協力し、荷物の融通や情報交換などを行っていた。このような業務上の協力が、京都における飛脚の活動に一定の自律性を生み、それが産地側からの京都問屋への交渉力につながっていた。

第VI章：結論

第VI章では、各章の内容を振り返るとともに丹後縮緬産地の形成と地域内外の諸要素との関係について考察した。その結果、丹後縮緬産地は集散地である京都における経済状況と流通構造の影響を受けながらも、産地内部の生産構造や有力生産者の行動により、各時期に適応的な流通構造を新しく確立していったことが分かった。

産地としての構造が大きな変化を見せない中でも自らの経営戦略を変化させていった豪農や、集散地を取り巻く状況が変化する中で産地側の自律性を活かして活動を続けた飛

脚といった、維持と変化の両方を行き来する人々の動きは、地域の構造と自由な主体という両側面から捉えることで、その解明に近づくことができると考える。

今後の課題としては、異なる商品を対象とした産地形成の研究と、消費者の動向が流通を通して産地形成に与えた影響の解明が挙げられる。